

## SRID 会員紹介： 松本洋さん

### 私の略歴



私は、自称「地球建築士」である。1956年に早稲田大学卒業。英国のマンチェスター大学修士課程で都市計画を学び、1958年より日本道路公団に勤務して以来、日本の高速道路建設に13年間携わった。1969年に6カ月、アジア開発銀行に出向し、アジアの開発に関わったことから、すっかり開発途上国に魅せられてしまった。帰国した1970年からは、(財)国際開発センターに研究員として勤務するようになり、開発プランナーとしての人生にますます磨きをかけた。1978年からは、(財)国際開発推進協会の常務理事、後に専務理事となり、日本の政府開発援助の推進に一役を担うことになった。1991年、要請されて国際文化会館に移り、92年に専務理事となった。思えば過去50年の間、58カ国以上の開発途上国を訪問し、国造りを手伝ってきたことが昨日のことも思い出される。

### 従事した仕事の内容

#### 日本道路公団 (JHPC) 時代

マンチェスター大学を修了して帰国した年に、設立されたばかりの日本道路公団に就職した。ちょうど世界銀行からの融資を得て、日本最初の高速道路となった「名神高速道路」を建設することになり、そのプロジェクトを担当した。世界銀行との折衝・調整の仕事から多くのことを学ぶことが出来、大変有益だった。1956年当時の日本の自動車保有台数は、わずか200万台の時である。(2006年では約7600万台)。ワトキンス調査団は、「工業国にしてこの道路状況は信じられないほど悪い」と報告書に発表した。融資条件としてドイツから設計技術、アメリカから舗装技術を取り入れることになり、公団はドイツ人技師、クサヘル・ドルシュ博士らを受け入れた。彼は品位と見識を持った第1級のエンジニアであり、日本の技術者たちは、彼の大きな人間性に裏付けられた仕事ぶりに感銘を受けた。

#### アジア開発銀行 (ADB) 時代



渡辺武アジア開発銀行総裁夫妻と共に、1984

道路公団での在籍が13年ほどになるころ、私は海外と直接関わる仕事に興味を持つようになった。1969年秋、縁あって、大来多佐武郎先生や石川滋先生のご紹介で、海外技術協力事業団(現国際協力機構)の援助で、アジア開発銀行が行う「東南アジア地域運輸調査」に参加することになり、マニラのアジア開発銀行に6カ月間、出向した。この調査は、東南アジア8カ国を対象に、中期(5年)、長期(10年)に渡る地域輸送プロジェクトの投資プログラムを勧告するもので、私は交通計画専

門家として6ヶ月間、コンサルタントの選定にいたるまでの準備に携わった。

### **(財) 国際開発センター (IDCJ) 時代**



マニラに出向した半年間の仕事は、私の中に途上国への思いをつのらせた。モノよりも人に関わる仕事をしたい、という気持ちがさらに強くなっていった。私は40歳になっていた。マニラから帰国後、1971年2月に設立されたばかりの(財)国際開発センターの研究者としての職を得た。運輸省や建設省の委託を受けて、開発プロジェクトのテーマを見つけるための幅広い調査を行い、その範囲は、アジア、アフリカ、中南米、南米におよび、10年間に、合わせて58の途上国を訪れた。

海外調査の一コマ、アルジェリア、1976

### **(財) 国際協力推進協会 (APIC) 時代**



国連環境ポスター原画展にて、1993

1975年、(財)国際協力推進協会が発足し、日本の政府開発援助(ODA)に関する情報を収集して民間企業に提供すると共に、ODAに関する国民の理解を深めるためにODAの意義と途上国の現状を広く一般に伝える広報・啓蒙活動が行われるようになった。1978年夏、私はその専務理事として迎えられた。こうした啓蒙活動は「開発教育」と呼ばれている。私は政府、民間企業とNGOという3つのグループをうまく結び合わせ、中枢のコーディネーターとして働くことを心がけた。当時は、政府とNGOとの間はぎくしゃくとした関係にあり、そこで両者が互いの違いを認め合いながら共有する目的や精神を確認できるように努力したものである。1987年に「国際協力の日」が制定されることになり、その日を記念して、ODA予算の支出はなかったが、政府もNGOも一緒に楽しめるお祭りを企画した。これが1990年に代々木公園で開催された「援助(エンジョイ)・国際協力フェスティバル」(第一回)であり、現在でも「グローバルフェスタ JAPAN」となって継続されている。

### **(財) 国際文化会館 (IHJ) 時代**

1991年5月、私は国際文化会館の常務理事となった。その2年前に国際文化会館の生みの親でもあり実の父でもある松本重治が亡くなっていた。1992年に専務理事となり、父の残した仕事を引き継ぐことになって、感慨深いものがあった。国際文化会館は、太平洋戦争を食い止めることが出来なかった無念さや後悔から、二度と戦争を起こすべきでないという信念に立ち、「日米その他の知識人同士が一つ屋根の下で寝食を共にしながら打ち解けた議論や懇談が出来る場所を作る」という考えで構想され、設立されたも

のである。

具体的なプログラムとしては、「社会科学国際フェローシップ」があり、これによって、170名以上の35歳未満の研究者を2年間、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、東欧、トルコ、イスラエル、ロシア、中国、フィリピン、ブラジル、エルサルバドル、セネガル、リビア、南アフリカなどへ派遣した。また、「アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム」という事業では、アジア諸国の様々な分野で活躍する若いリーダー的な専門家を6~7名、2~3か月間にわたって招聘している。全員が会館に滞在して、フィールド調査や意見交換のワークショップなどを繰り返し、未来に向けた若いリーダーたちのネットワークづくりが進められている。

### 仕事上の苦勞と喜び

私は人間が好きである。その思いで、50年あまり、人に関わってきた。人助けをしばしば頼まれる私は、「よろず引き受けどころ」を自任している。ある人は私に、「何故得にもならない他人事を引き受けて、そこまでのめり込めるのだろうか」と聞き、ある外国人も、「ミスターヒロシをこうも駆り立てるものは何か」と問う。正直なところ、自分でもよくわからない。ただ言えることは、「そこに人がいるから」。

私は一級建築士だが、私の本業は、1本1本の線で具体的な図面を構成していくのではなく、人と人の絆やネットワークを築いていくことだ。「建てる」は、「立てる」。その場所に人を定めることである。適材適所、私流に言えば、それこそまさに建築士の仕事である。そこに私を必要とすることがあり、私の助けを待っているから、私は人の力になりたい。若い人であろうが、肌の色や言葉が違おうが、たとえ価値観を共有していなくても、人間として真剣勝負の気概をもって、向き合えば互いの尊厳をおのずから感じるだろう。もちろんその基盤としては、「人を信じ、信頼する」ことが不可欠だ。。。関わった人々と分かち合う喜びこそが我が生き甲斐なのである。

### 国際開発にどのように関わって来たか

途上国をまわって私が目のあたりにしたのは、たとえ物質的には恵まれていなくても、その日その日を一生懸命に、そしてのびやかに明るく生きている人々の姿である。開発という面ではまだまだこれからのところが多く、工業社会・消費社会というモノサシを当てれば確かに未成熟としかいえないでしょう。しかしキラキラとした目の輝きが放つひたむきな明るさは、ある種のゆとりにも思える。

それは、長い伝統文化に培われた優しさやあたたかさだ。これらと近代化をどう両立させていけばよいか。この問題こそが、国際社会においてより多くの人々が対等な人間同士として付き合っていくために、日本人が援助国の人々と共に取り組んでいくべき、特段に大切なテーマなのだ。。。写真を撮り続けることで実感したのは、この地球に生きる人同士は、どんな境遇や運命にあるにせよ、一対一で向き合えばつねに対等なんだ、ということである。

## 私の生き方



マンチェスター大学から  
名誉博士号を授与される（前列右端が筆者）

私の人生を動かしてきたのは、その瞬間、瞬間を精一杯生きるという気持ち。これにほかならない。そして、そこで人と出会えば、その人と対等な立場と真剣勝負の気迫を持って対話をする。生き方のモットーとしては、やはり三つのP、パブリックマインド（おおやけ心）、プロデュースマインド（しかけ心）、そしてプレイマインド（あそび心）に尽きると思う。

注：幸にもこの稿が陽の目を見られたのは、藤村建夫会員の暖かく、適切、見事な再編集で、拙著「地球建築士：国際交流・協力の五十年」、(2008年12月31日、柏艚舎発行)の全349頁が100分の1に凝縮されたお陰です。